

《中学生の部》

佳作（警察庁交通局長賞）

兵庫県神戸市立御影中学校

3年 新美 りを

笑顔の未来へ やさしく運転を

中学生になって助手席に座ることを両親から許されるようになると、車内から見える景色が変わった。目の前の横断歩道をお母さんと手を繋ぎびよんびよん飛び跳ねながら渡る子。片手をピンと上げて渡る子。その可愛さに笑みがこぼれてしまう。横断歩道での幼い日の私も、車に乗る大人たちの目にはこんな風に映っていたのだろうか。

この夏、私は二週間で二度も交通事故を目撃した。一件は自動車と自動車、もう一件は自動車とバイクの衝突事故だった。いずれも歩行者は巻き込まれなかったが、目のあたりにした光景がショックで食欲がなくなったし、あの時の大きな衝突音がしばらく耳から離れなかった。交通事故は、当事者やその家族・友人はもちろんだけれど、目撃者の心をも大きく傷つけるのだと知った夏だった。

どうして交通事故が起こってしまうのか、運転免許を持っている大人に聞いてみたら、みな「運転中に病気の発作等で不運にも事故が起きてしまうこともあるけれど、多くの場合、ほんの一瞬の気の緩みが原因なのではないかな」と言う。ならば技術に期待するしかないのかもしれない。いずれすべての車が完全自動運転になる日が来ると言われているが、「運転者状態検知センサー」のようなものも開発してはどうか。運転中に眠気が襲ってくることだって、疲労困憊の時だってあるだろう。センサーで運転者の疲労・睡魔・イライラを検知したら、車両をゆっくり停止させて運転を継続できない状態にし、おすすめのリラックスミュージックを自動的に流すなど、運転者の状態を客観的に判断し早めに運転を停止させる機能が車にあったら、「自分は現在運転には不適切な状態である」という自覚がない運転者に休息を促せるのではないかな。

また、運転免許証をスキャンしないとエンジンがかからないようにした上で、急加速や急減速、スマホ使用等を含めた運転中の道路交通法遵守状況を車が検知・記録し、減点する制度にしたらどうだろうか。高い点を維持している人にはガソリン代や駐車場代が値引きになる等メリットがあり、減点が多い人には罰金や研修を義務付けたら、みな、今よりも注意深く運転するのではないだろうか。

とはいえ、プライバシーの問題や駐停車増加による道路の混乱等の問題を考えると、これらの案は現実的ではないだろう。期待を込めたアイデアは尽きないが、交通事故の悲惨

さを伝え、標識などで運転者に注意喚起を促していく地道な積み重ねこそが、現段階においては交通事故を減らすための最善策だと思う。テクノロジーは現在進行形で進歩しているが、今この瞬間も日本全国で横断歩道を楽しそうに渡っているであろう何千何万の子どもたちの笑顔を守るのは、ほかでもない、運転者一人ひとりの「心」なのだ。

「お母さんが小さいときは、交通事故がたくさんあったのよ。」

私が想像する未来、横断歩道を楽しそうに渡るわが子に私はこう話している。それを聞いた子どもはこう言うだろう。

「でも今は、車も人もみんなニコニコだね。」